

体験者たちの肉声で浮かび上がる実像 五七幹部学校研究の基礎資料

岩佐 昌暉



王耀平主編／鎌田純子 山田多佳子
松尾むつ子 萩野脩二共訳
回想の羅山 上下巻
五七幹部学校の記憶 外経篇

A5判
上 228頁／下 274頁
朋友書店
[税込 2,750円／2,970円]

五七幹部学校（以下、特に必要のない限り「幹校」と略記する）は、文革初期の六八年五月に黒竜江省革命委員会が幹部の下放労働と思想教育のために設置した農場（柳河五七幹部学校）がその嚆矢である。その秋一〇月毛沢東の称賛の語とともに『人民日報』に紹介されると、たちまちのうちに全国に設置されるようになった。

これを学校と呼ぶのは、それが中央から地方に至る中国共産党や人民解放軍組織、各級の行政機関、各種団体の事務部門で働くホワイトカラーたち（この人々を指導的な地位にいないに関わらず、すべて「幹部」と称した）や、作家、俳優など文学芸術界の人士、専門学校以上の教育機関の教師、科学技術者など知識人の再教育機関だったからである。

幹校は《彼らが集団で農村に移住し、農業労働をしながら、貧農・下層中農（地主、富農、中農以外の農民）に学び、自分たちの思想を、真に人民の側に立ち、社会主義革命に献身できるものに改造する再教育の場》という位置づけを与えられていた。省レベルの幹校は省内に、県レベルのそれは県内に置かれたが、中央組織の幹校は北京から離れた省の貧しい農村地帯に作られるのが普通だった。

建国後、中国がアジア、アフリカ諸国に行っていた経済援助業務を担当した役所に「対外連絡経済委員会」、略称「外経委」がある。外経委も当然幹校を設置した。それは六八年一二月河南省息県につくられ、翌六九年三月、隣の羅山県に移され「外経委羅山五七幹部学校」と呼ばれた。

外経委羅山幹校が本格的に始動するのは、六九年秋から。この年中ソ関係は悪化、国境で武力衝突が発生し緊張が高

まっていた。一〇月に入り、突然中央の行政機関や党組織、団体等に地方への分散命令が下った。いわゆる林彪一号命令で、ソ連軍の首都攻撃が迫っているとする党の判断によるものだった。この命令に従って各省庁、機関、組織が、中枢を担う人数だけ残し、家族ともども地方に疎開、北京は閑散とした。疎開先は各機関が前年に設置していた幹校だった。外経委の職員とその家族も羅山の幹校に下放した。彼らは、成人は「五七戦士」(略称「老五七」、子供は「五七小戦士」(「小五七」と呼ばれ、総数は六九年には五百人を数えた。

本書は、その外経委羅山幹校で過ごした人々の回想録である。訳書は、上下二巻に分かれ、上巻に老五七の回想、下巻に小五七の文とその他関係の文章(二〇一三年に羅山で開かれた彼らの同窓会とも言うべき「第二回羅山「五七」小戦士集会」の祝辞、賀詩、発言、参加記、幹校と現地社会の関係性を論じた論文など)を収め、各文末には萩野脩二の詳細な訳注を付す。また外経委幹校の年表、外経委の歴史、羅山幹校の見取り図、関係者の写真などを収めるほか、松尾むつ子(訳者)の感想と萩野の解説を加えている。

執筆者という点から言えば、老五七で原稿を寄せているのは当時の外経委の次官・局長級の高官から、若手の職員まで

現役の官僚たち、幹校付属の工場で働く下放知識青年や羅山の農民の子弟(彼らも文革後外経委に入り、その後身たる商業部の職員として定年を迎えている)などである。下巻の回想文の主体を占める小五七は、家族として羅山に来ていた当時の小中学生で、多くは文革後大学を出て今は指導的な役割を担っているが、すでに第一線を退いている者もいる。

ただ本書は単純にかつて文革の一時期を羅山で過ごした老五七や小五七たちの、往時をしるぶ回想文集として編まれたものではない。編者が、多くの文章は「文学性や読みごたえはあまりない」が、「言わばたたき台であり、後の研究者の踏み台にもらうもの」と言い、表紙に「対外経済連絡委員会「五七」幹部学校歴史研究資料匯編」と記す通り、歴史資料の性格をも意識して編まれている。

これまで五七幹部学校について読み得た文革期の公式文書などの資料には、その沿革や目的、幹部の思想改造など概要の記述はあったが、その実態は書かれていなかった。本書は幹校生活体験者たちの記憶の記録であり、評者の知りたいことを具体的に述べた記述が少なからず見つけた。評者が特に知リたかったのは、以下のような点だった。

①幹部下放の制度の実際(下放する幹部の人は誰がどうい

う方法で行うのか。時期を分けて交代というが、下放期間はどれだけか。下放期間の給与、幹校での指揮命令系統等)、②生活実態(一日の時間表、休日、食事、独身者と家族帯同者の生活の区別、共同生活の場合の問題等)、③労働と思想改造(労働を通じた思想改造は、具体的にどう行われているのか)、④学習活動(「貧農・下層中農に学ぶ」学習の実態等)、⑤老五七、小五七と現地住民との関係、⑥政治活動(文革の進展に伴い展開された幹校内での政治活動の実態)、⑦批判され、打倒された幹部の扱い(彼らは一般の老五七とどう違うか)などである。ただ、このうち③④は、ほとんど記述がなく、評者の期待はかなえられなかった。以下は、①を中心に、本書を読んで評者が得た知見と雑感である。

幹校については、文革主流派(造反派)が反対派を職場から排除し、打撃と報復を行う強制収容所だ、といったイメージが流布している。例えば嚴家祺、高皋著『文化大革命十年史』(邦監訳、辻康吾ほか、岩波書店、一九九六年)は王洪文が「言うことを聞かぬやつはまとめて幹部学校で働かせろ」と言ったと書いている。だが、本書を読むと、それが必ずしも幹校の実態を全面的に反映したものではないことがうかがえる。

幹校にそういう機能があったのは確かで、特に文革初期の

奪権闘争で打倒され、「牛鬼蛇神」として監禁、批判の日々を送った高級幹部たちは、北京の「牛小屋」から幹校に設けられた「牛小屋」に移され、残酷な扱いを受けた。外経委で言えば、文革後に復活して上海市長や副総理を務めた汪道涵(元外経委次官)がそうである。

だが、幹校に下放した職員の多くはそうではなかった。六九年三月羅山に到着した第二陣の場合だが、希望者が申し出、役所の全権を握っていた軍事管制委員会が審査して名簿を公表、次いで各家に人を派遣して各人の覚悟を調べて確定という手順をふんだ。批判されていた二十数人は最初から下放が決まっていた(程飛)。また、第二陣の応募者には于笑蘭のように「行きたくなかったが、革命的態度を示すために応募したら、本当に批准され、仕方なく羅山に行った」と言う者もいたが、基本的に自主的に志願したのである。第三陣以後の人選の手順については誰も書いていない。

下放期間等については第一陣は交代時期が決まっていて、誰が交代するかは、幹校での作業グループ全員で推薦し、幹校本部が承認して決める。その後の記述はないが、七一年九月の林彪事件以後、北京の外経委と幹校から軍事管制小組が撤退して後はかなりルーズになったようで、老幹部たちが次々に病気休暇を取って北京に帰る(郭震遠)という一種の野

放し状態が生まれた。于笑蘭は、七二年末には大部分が北京に異動になったのに、自分には通知が来ないため、七四年に勝手に病休をとって北京に帰り、そのまま幹校に帰らなかったと書いている。羅山の幹校は末期にはもはや北京にも現地にも管理する者のない状態だったことも分かる。

幹校での生活に触れるとき執筆者が一様に挙げるのは、幹校の労働の厳しさ、生活環境（特に住居）のひどさである。だがその一方で、彼らはこの地の農民の衣食住の貧しさに驚いている。こういう点では子供たちの方が正直で下巻には小五七たちの農民の貧しさに対する証言が少なくない。例えば呂争鳴は羅山の印象として「第一は貧しいということ」「乞食をする者も多く、煉瓦の洞窟式住居で凍える者もいた」と

回想している。王家驄も農民の住居を「かまどと粗末な家具だけ」「壁以外は何もなし」電灯がなく夜は屋根から星も見え「空き地で寝るとほぼ同じ」だったと記している。北京の幹部とその子弟たちは社会主義下の農民がどれほど苦難の日々を送っているかを、下放して初めて知ったわけである。評者はここに毛沢東が幹部の思想改造の場として幹校のような場を着想した理由をみないわけにはいかなかった。

最後に③④について触れておく。労働による思想改造と、幹部の政治運動への参加は五七指示の根本思想であり、幹校設立の目的の一つだったはずである。だがこれに関して、程紹義ら数人が貧農・下層中農との交流の様子を記す以外に、誰も書いていない。思想改造のための指導や講習らしきものが行われた形跡もない。これは羅山だけの現象か？

赤井益久著

△最新刊▽

唐代伝奇小説の研究

唐代に至って一変した伝奇小説の小説史に占める歴史的意義と意味をそれぞれの作品に即して考察した雄篇。
【目次抄】Ⅰ 伝奇と説話 伝奇作者の身分と立場 Ⅱ 志怪の系譜 変虎譚の諸相 Ⅲ 恋愛物語 「霍小玉伝」校覈 Ⅳ 唐代伝奇の新たな地平 「杜子春伝」臆説 Ⅴ 附篇 「七夕」伝承について

岸本美緒著
礼教・契約・生存
飯島 渉著
「中国史」が亡びるとき
有澤晶子著
見立の文化表象
松村茂樹著
書と画を論じる

研文選書 3500円
明清史論集3
研文選書 2200円
地域史から医療史へ
2400円
中国・日本——比較の観点
研文選書 2000円

研文出版〈税別〉

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

すべての幹校に共通の現象だったのか？ 他の幹校ではどうだったのか？ 今後の幹校研究の問題の一つであろう。

本書の編集者・王耀平氏は、文革期の二大政治運動たる五七幹部学校Ⅱ「幹部の下放労働運動」と「知識青年の上山下郷運動」のうち、後者は良く知られ、研究されてもいるのにも前者は大半の文革研究者からも「なおざりにされている」と慨嘆している。その一方で王氏は「今日、多くの研究者が『五七』幹部学校の歴史を粉飾し、『五七』幹部学校を、腐敗に反対し廉潔を賞揚する偉大な実践であつたと褒め讃えている」という「心を痛ましめる」（王耀平「序文」）傾向があることも指摘している。これは、王氏ら「政治体制改革において絶対に文革の歴史を受け継いではならない」という立場での幹校研究とは違い、近年各地で五七幹部学校跡地が再建され、文革の歴史遺産として批判的観点を欠いた観光施設化している現象をさしているのだろう。ネット（百度）で「五七幹部学校」を検索すると、幹校研究が文革史研究の一領域として確立しつつある様が見取れる。その中には幹校賛美も幹校批判もあるが、研究自体は決して「なおざりにされている」わけではない。

大陸の研究に比べると日本の研究はようやく出発点に立つ

たところだろうと思う。日本では萩野脩二氏が現代文学と幹校の関係を中心に行った調査研究（萩野氏の仕事についてはイエンゾ「邱堦爾氏の《五七幹部学校》研究」萩野脩二『愚生耳語』三恵社、二〇二二年所収、に詳しい）が幹校研究の始まりだと思ふ。氏の仕事が貴重なのは、特定の幹校での生活を体験した個人の記録を続々と翻訳刊行し、幹校における具体的な生活実態を知る基礎資料として提供してきた点である。本書の刊行もその継続と言える。

最後に本書全体への感想を一言。本書は、老五七と小五七が自分たちにとって最も思い出に残る日常生活の出来事を、自分の肉声で綴った回想文集である。回想以外に目的はない。だが彼らの回想は、文革期中国社会の格差構造や、文革が目指した「三大差別」解消の必然性から、個人生活への過度な政治の干渉による人間性の危機などの問題までを期せずして露わにしている。

体験者の肉声が、幹校生活に凝縮された文革の日常がいかに異常なものだったかを明らかにし、政治的言辭を剥ぎ取った幹校の実像を浮き彫りにしているのだ。これが本書の特色であり、幹校研究の貴重な基礎資料たるゆえんである。

（いわさ・あきまさ 九州大学名誉教授）